

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	呉 爽
論文題目	永楽北蔵とその表装の染織に関する研究—名物裂との比較を中心に—
審査要旨	
<p>本論文は、中国明代の染織品、特に錦、粧花緞、織金、綾など各種の絹製文織物の図案、色彩、制作年代、流通と日本における受容の様態を論じたものであるが、本論文の最も大きな特色は、従来の染織史研究が看過してきた資料群に着目したことにある。それが、永楽帝の勅によって開版され、明代を通じて九次にわたり印造・下賜された大蔵経すなわち永楽北蔵の、一蔵六千余冊の表装に用いられた染織品である。明代染織の伝世品は、中世・近世初期の日本で珍重された名物裂のなかに多数含まれているが、制作時期の判明しないものが多い。一方、生産地である中国では近年陵墓からの出土例が増えつつあるが、多くが朽損を免れていない。本論文が着目した永楽北蔵の表装裂は、宮廷御用の高級な多種類の絹製文織物が一括で伝存する点、下賜の年次から織成年代の下限を知ることができる点に、稀少な伝世染織資料としての大きな価値がある。本論文は、そのことの意義を明らかにし、実際の作品の調査を通して得た具体的な資料を基にして、名物裂との比較をおこなった、独創的な成果である。</p> <p>論文は全六章と序章・結論で構成されている。まず第一章「明の染織芸術」では、制作年代の比較的明確な明代染織の出土品と伝世品を網羅的に洗い出し、現存状況とその問題点を概観した上で、種類の多さと保存状態の良好さ、織技や用途の共通性において、日本に伝来する名物裂と永楽北蔵の表装裂こそ最も好適な比較研究の対象たり得ることを、明快に提示している。次いで第二章「仏経装幀について—染織による荘嚴を中心に」では、文献史料と遺例によって仏教經典の装幀の変遷を歴史的に通覧し、仏経の荘嚴として染織品が果たしてきた役割について論ずるとともに、六千余の版経経冊を絢爛たる多様な織物で表装した永楽北蔵が、仏経装幀史上きわめて異例な存在であることに注意を喚起した。これら二章はやや概説的な叙述であるが、第三章以下の考証の前提を周到に示したものとなっている。</p> <p>第三章「永楽北蔵について」では、同じ永楽北蔵であっても、現在確認できる全ての蔵本が多彩な絹織物で装幀されたわけではなく、単色の黄や青の平絹によって装幀された蔵本も年代によって見られることを問題とし、装幀の様式と下賜年代との関係について考察している。これに先立ち、各種の史書や金石資料を博搜して永楽北蔵の下賜の事跡を洗い出し、先行の大蔵経史研究によって指摘されていた一三九件に加えて、新たに三八件の下賜の事実を見出したことも、本論文の寄与の一つに数えられよう。それらの下賜事跡は、永楽北蔵が完成した英宗期だけでなく、神宗の万暦年間に集中的に確認され、なかでも万暦十四年から十九年前後に下賜された蔵本が多彩な絹織物による装幀を特徴としていること、そして、それらの下賜の多くが神宗の生母慈聖皇太后の関与によるものだったことが、順序立てて論じられている。</p> <p>続く第四章では陝西省漢中市洋県智果寺所蔵の永楽北蔵、第五章では成田山佛教図書館所蔵の永楽北蔵をそれぞれ取り上げ、実地調査で得た詳細な作品情報と所見に基づいた考証を展開する。智果寺蔵本は最近になって四一三九冊の残存が確認されたもので、論者は、境内に残る聖諭碑をはじめとした諸史料から、これが慈聖皇太后の直接的な関与により万暦十四年に神宗が下賜した一蔵に、『華嚴懸談』以下四一函の続蔵を加えたものであったことを明らかにした。そして、慈聖皇太后による続蔵の刊行や経漢廠の再建は皇嗣繁衍を願ったもので、その後の永楽北蔵の集中的な下賜は、仏への還願の一環だったと指摘し、豪華な文織物による表装を生んだ背景の事情を浮かび上がらせた。また、智果寺蔵本の表装裂において観察できる格狭間形龍文、五つ爪龍文、四つ手連雲文、鳳凰文などの意匠について、各種の名物裂の実作例との比較をおこない、智果寺蔵本の下賜とほぼ同時期の茶会記に記録された裂は、一時代前の古様なものであったことを検証している。</p> <p>成田山蔵本は、現存わずか二八七冊で来歴も不明なため従来殆ど注意されることがなく、本論文によって初</p>	

氏名 吳 爽

めて歴史的な位置づけを得たと言ってよい。すなわち論者は、表装裂をはじめ題箋の詳細な観察の結果、これもまた万暦十四～十九年の下賜蔵本と判定でき、改装はされていないことを論証した。それを踏まえて、保存状態が良く各種の織文様を含む成田山蔵本を当該年間の基準作例とし、制作年代の不明な名物裂の年代判定を試みている。ここでは牡丹唐草文、樗蒲文、半越+地絡みの織り方による金襴を取り上げており、詳細かつ実証的な考察は説得力がある。また、織成組織写真を含む論者自身の撮影による成田山蔵本の全データは、本論文において題箋の千字文番号に基づいて編成し直されたもので、一つの経函に収納された十冊それぞれの表装裂に一定の法則があることが、論者の指摘の通り一目瞭然である。それが明代の宮廷における服色制度に準拠していることも、明らかにされた。なお、本章では成田山蔵本の表装裂の地組織における比例と『酌中志』『内板経書紀略』等の史料から、一蔵の代価の具体的な算定も提示している。興味深い試みではあるが、確度はいささか疑わしく勇み足と言えよう。

最後の第六章「名物裂の受容の様態」では、前章までの考察を踏まえて、名物裂の生産地中国での用途と価値、受容に際しての選択的嗜好、名物裂が元来の匹料としての性格とは異なる性格を得たことについて、具体的な個別の作例にもとづきながら考察する。明代の装幀用織物が基本的に服色制度と一致して多色や赤色を尊んだのに対し、『古今名物類聚』における裂類の色を分析すると単色や寒色系が多いことや、そのことと金襴・緞子の定義との関係など、随所に傾聴に値する指摘がなされており、総じて明代染織史の俯瞰的視座を以てあらためて名物裂の位置づけが図られたものと評せる。

審査委員会では、名物裂研究の比較資料として永楽北蔵の表装に注目した着眼の良さと、堅実な実作品調査を基盤とした考察である点に、特に高評価を得た。但し、成田山蔵本は零本であり、智果寺蔵本は大部分が未整理で調査が一部に限られたことに憾みが残ることもまた確かで、今後は他の永楽北蔵をはじめ、絵画中に見られる染織品、西藏仏教のタンカ等の表装裂などにも探索を広げることが望ましいとされた。また、織文様の様式を検討する際の文章表現に、もう少し説明の工夫が欲しいとの意見も出された。とはいえ、明代染織史研究に寄与する独創的な達成と言ってよく、審査委員会では博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。

公開審査会開催日	2016年 6月 21日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	肥田路美	中国美術史	博士(文学)早稲田大学
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	成澤勝嗣	日本近世美術史	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	内田啓一	日本中世美術史	博士(文学)早稲田大学
審査委員				
審査委員				